

第28号

平成4年1月

© 1992

(株)システムクリエイツ

SCだより

編集発行人

清水吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202

プロセスレベルの改善 ①

ソフトウェア抜きで成り立たない

既に今日の社会システムはソフトウェア抜きでは成り立たなく成っている。ビデオカメラやビデオデッキ、テレビは言うに及ばず、炊飯器や洗濯機、冷蔵庫の中にも既にマイクロコンピュータ(以後MPU)が入っている。

昨年(1991年)には、電子レンジに数百Kバイトのソフトウェアが組み込まれた。これはレンジに投入された材料を全て自動的に認識し、材料に適合した調理方法を選択し、管理し、遂行するためのプログラムが入ったためである。今後、ISDNが普及し何らかの形で画像処理をする電機製品にも、相当な規模のソフトウェアが内蔵されるだろう。

家電製品と言えども、内蔵されるソフトウェアの規模がこれだけ大きくなると、開発環境も整えなければならないし、明確に定められたOSを想定した方がよい、ということでマイクロソフトを初めアメリカのOSメーカーが、日本の家電製品に目を着けて、既に接触を始めている。

このような家電製品の裏で、おもちゃの世界にも今やソフトウェアが浸透し始めている。まるで嘗ての『スペイン風邪』の様に世界中の子供達に広がった“ファミコン”や、その類のゲームおもちゃの様に、誰が見てもソフトウェアがそこに参与していることが明らかなもの他に、人の声を判断して、その声の内容に応じて反応を変化させる縫いぐるみもある。恐らくラジコンの世界にも間もなくソフトウェアが侵食し始めるだろう。おもちゃから“おもちゃらしさ”を無くそうとすれば、各種のセンサーを巧みにコントロールするソフトウェアが必要になってくる。

家中ソフトウェアだらけ

近い将来には、家中の家電製品は全てソフトウェアによって機能するようになるだろう。炊飯器や洗濯機、ビデオデッキ等には、全てネットワークOSが組み込まれ、外から電話回線を通して指令を出すことが出来るかも知れない。或いは一軒の家に一つの無線のレーザーを備えることによって、直接無線で指示を出せるかも知れない。ひょっとすると照明器具にも、周囲の明るさを自動的に検知して快適な明るさを保持するために、MPUが内蔵されるかも知れない。

もっともソフトウェアは見えないために、使っている人間はそこにソフトウェアが絡んでいるとは知らずに、単にボタンと表示部が幾つか付

いている(新しい)電気製品だと思うだろう。良いか悪いかは別にして、この社会は否応なくソフトウェアで埋め尽くされる。

品質が求められる

これだけソフトウェアが氾濫してくると、単に動けばよいというだけでは済まないものも出てくる。例えば全自動の洗濯機ではバルブをコントロールするプログラムに欠陥があれば、家中水浸しになるだろう。またこのような明らかな欠陥でなくても、バルブの『開』『閉』があまりにも急激であるために、水道管の接続部分に過大な負荷がかかり、水道設備としての寿命を縮めるだろう。電磁バルブを想定した工業設備では問題は生じないだろうが、家庭用の水道配管は電磁バルブなど想定していない。この場合人間が蛇口を捻ると同じ様にスクリュウ式にコントロールすべきであろう。

こうなると、何処まで実際の環境をテスト段階で想定できるかが、商品の善し悪しを分けるかも知れない。

スキルアップだけでは足りない

ソフトウェア・エンジニアを抱える部署では、程度の差こそあれSEの教育に力を入れている。中には50項目以上ものスキル・リストを

用意して、教育体制を整えている企業もある。その項目の中に“交渉”“コミュニケーション”或いはアプリケーション開発に必要な“関連業務知識”などに混じって“システム設計・開発技法”というの含まれている。ソフトウェアの開発技法も、個人のスキルアップの一つとして捉えられている。

勿論このことが必ずしも悪いわけではないが、この種のシステム開発技法の考え方を身に付けたところで、これを発揮する場面は殆ど場合は「集団の中」である。例えばウォークスルーの考え方や実施に際してのノウハウを覚えたとしても、ウォークスルーは一人では何の役にも立たない。たとえチームの全員とまではいなくても、主要メンバーは同じ様に心得ていなければ、効果を発揮できない。つまりシステム開発技法というものの多くは、少なくとも関係者が足並みを揃えて取り組まなければ旨く機能しないのです。といってもこれは必要条件であって、十分条件ではありません。

ところが現実にこの様なシステム開発技法の研修に参加しているのは、一般にグループの中心人物ではないことが多いのです。それはこの種の研修が1日や2日で終わるものではなく、グループの中心人物が1週間も現場を離れることが許されない状況に於ては、代わりの者を参加させることは、自然な成り行きと言わざるを得ません。

そうして彼らが得た「知識」を活かせる場面など、現実には存在しないのです。

(次号に続く)

死語にしてしまった「門限」

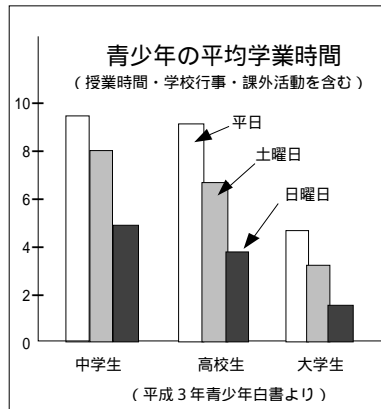
平成3年版の青少年白書によると、中学生が勉強に追われている様子が図の様に明らかになった。平日の大学生は4時間55分と最短記録なのに対して、中学生は約2倍の9時間8分となっている。これは高校受験を控えて、中学生の4割が塾通いを行なっていることによる。

図では省略しているが小学生でも平日が7時間19分、日曜日でも2時間近くになっており、次第に小学生にも中学受験の影響が見えてきた。学校間格差のために高校受験が過激になってきているのと、都市圏における公立中学校の類縁が、中学受験に拍車をかけている。

中学受験の為に、小学4、5年生から塾に通い始めるの

が一般化している。その代償としてサッカーやバスケットボールなどのスポーツや子供の「遊び」は全て没収される。かくして彼らの遊びは、塾帰りに自動販売機で買った炭酸飲料をシェイクして泡の飛ばし合いとなる。

夜の9時を過ぎて集団で電車で飛び乗って



くる光景を見ると背筋が寒くなる。身長は150センチ前後で、喋っている内容は確かに小学生なのだが、「夜」に対する怖れを持っていない。20年近く前に見たニューヨークを背景にした若者の映画を思いだした。どうやら『門限』という言葉は大人の方から反古にしてしまったようである。

かね

暁鐘の音

11

時間 — その正体不明なもの

「光陰矢の如し」 この言葉はよく知られた言葉です。「時間」は目に見えないために、日本では古くから「光陰」とか「惜陰」というように「陰」という文字を使って表します。この格言は、時間と言うものは、うかとしていくとあつという間に過ぎて行くことを論じているのです。が、この言葉では「光陰」が主語に見えるため、「時間」が勝手に過ぎ去って行く印象を与えます。

§ § § § §
 一体「時間」というものは自ら過ぎて行くものなのだろうか？ 科学の世界で扱う「時間」と、ここでいう「光陰」とは違う筈なのだが、普段これを分けて意識することはまずありません。【約束の時間】とか【今日の会議は珍しく二時間で終わった】という時の「時間」と、「それをやる時間があります」という時の「時間」は同じなのだろうか？

一般に、何もすることがない時は、粘り気の高い溶岩のように長く感じるのに対して、何かに没頭している状況では、早送りのフィルムのように時間は短く感じる、といわれます。昨年亡くなられた本田宗一郎氏は、熱中すると何日も家に帰らず、スパナを持って車の下に潜っていた、という逸話が残っています。恐らく一日は何と短いものかと、恨んだことでしょう。

§ § § § §
 ところで、時間に対する感覚にはもう一つあるように思えます。

一昨年、私は「構造化分析・設計手法」の研修に参加しました。その研修は五日間で、午前九時から夕方六時過ぎまでびっしり行なわれました。その五日間は私には二週間以上の長さを感じたのですが、それは研修が退屈であったからではありません。それどころか、家に帰ってからその日の研修内容を復習し、疑問点を明日質問するためにレポートにまとめなければなりません。

せん。その時の講師は構造化手法の提唱者の一人であるベージョーンズ氏でした。当然ジョーンズ氏は日本語を話せません。それに対して私は逆に英語は話せない。だがこの構造化手法を一年以上かけて調べてきた私にとって、疑問点を明かにする絶好のチャンスと考えた末、朝早めに研修会場に向いて、レポートにしたものを主催者の方に英語に訳してもらい、それを講師に伝えてもらう方法を採ることにしたのであります。多分主催者にとっては最も煩い参加者だったことでしょう。勿論研修そのものは通訳が入っているのです、その時点で質問は逐次受け付けられるのですが、込み入った質問は旨く相手に伝わません。こうして最後の日を終えたとき、たったの五日間しか過ぎた感じがなかったのであります。

§ § § § §
 確かに没頭した筈なのに、時間は私の歩調に合せるように「並走」していました。作家の吉川英治氏は、昭和十四年の元旦から読売紙上に「太閤記」の連載を始めましたが、その年の夏からは朝日の紙上に「宮本武蔵」を、さらに八月から地方紙に「三國史」を書き始めています。かのミケランジェロも、その隆盛を誇る時には、同時に幾つ

もの壁画や彫刻をこなしています。彼らにとって「時間」は勝手に通り過ぎて行くものではなく、「自在なるもの」なのかも知れません。仕事に没頭しているはずなのに、「時間」は足早に過ぎ去ってはいないのです。吉川氏にするミケランジェロにしろ、そのような状況の時に作られた作品こそ、充実し評価が高いのです。

§ § § § §
 こうしてみると、「時間」は矢のように「過ぎる」のではなく、矢のように「過ぎす」といった方が正しいでしょう。そしてそれが「矢のように過ぎる」ように見えるか、「ゆっくり歩いて」見えるかは、我々の「為し方」によるのでしょう。

§ § § § §
 「八七六」これは一年間の時間数ですが、このうち約五五 時間が目覚めている「時間」です。これを多いたと感じますか？ 或いは少ないと感じますか？

人なみに 叱られてみたい 時もある
 俺の親爺は 俺がこわいか (中二男)
 心から すがりつこうと する時に (中一女)
 家庭とは 父きびしくて 母やさし
 それでいいのだ うちと違うが (中二男)

これはその昔東京新聞に載った、「我が家」を題にした中学生の狂歌の一部です。彼らは今や逆の立場に成っているはずですが、果たしてあの時の気持ちが生きていてくれれば良いのですが...